

感謝に対する応答の指導について

——日本語教育の視点から——

西 香 織

0. はじめに

日本語を実に流暢に話す外国人がいる^{注1}。発音もイントネーションも日本人とほぼ変わらない。しかし、談話の中でどこか違和感を覚えることがある。例えば、次のようなやりとりである。

(1) 日本人：ほんとにありがとう！助かったわ。

外国人：どういたしまして。別に大したことじゃないじゃん。

2人は親しい友人関係にあり、ふだんはくだけた口調で会話をするにもかかわらず、感謝の言葉に対してその外国人は必ず「どういたしまして」と答える。「どういたしまして」の語義の意味は、相手の感謝に対する丁寧な打ち消しであり、応答表現として用いることは決して誤りではない。では、なぜこのやりとりが不自然に感じられるのか。

また、たとえば、自分の子どもが他人から何かをもらった時、日本の親であれば、「ほら、おばちゃんに『ありがとう』は？」等と、子どもに礼を述べるよう促すのが一般的である。ところが、自分の子どもが他人からお礼を言われた時、「ほら、『どういたしまして』って言いなさい。」と子どもに促す親はほとんどいない。「こんにちは」や「さようなら」、「ありがとう」等のあいさつは、親や教師等、周囲の大人が子どもにきちんと言えようしつけるのに対し、なぜ「ありがとう」の応答に対しては重きを置かれぬのか。

多くの言語において、「ありがとう」等の感謝やそれに対する応答には、ほぼ定型化した表現（慣用句）が使用されている。たとえば、『世界のことば・出会いの表現辞典』の一項目に「感謝するときのことば」（日本語例：ありがとう—どういたしまして）があり、59言語の表現が列挙されている。それらの表現の意味や実際の運用のしかたは社会や文化によって無論異なるが、世界の多くの言語において感謝とそれに対する応答の表現が存在することは明らかである。

感謝のやりとりを含め、あいさつは他人とコミュニケーションを行う上で、最も重要な要素である。本稿では、日本語における感謝とそれに対する応答をとりあげ、日本語のあいさつの特徴を明確にした上で、日本語教材において、特に応答表現がどのように導入され、どのように扱われているかを分析し、日本語を母語としない人々を対象にした日本語教育において、感謝に対する応答はどのように指導されるべきかを考えたい。

1. 先行研究と問題の所在

1.1 あいさつについて

『国語学研究事典』は、「あいさつ」を、「人間が他人との間に親和的な社会関係を設定するために、または、すでに設定されている社会関係に基づいて、それを維持強化するために行う

注1 本稿で述べる「外国人」とは、日本語を母語としない者を指す。

社交・儀礼的な行動様式の一つ」と定義している。また、鈴木（1981）は、「あいさつ」について、以下のように述べている。

実はあいさつは言語以外の人間の行動様式とも密接に関連しているために、言葉だけに注目しては、あいさつの本質を見逃すおそれもある。黙礼や会釈、あるいはお辞儀や握手、抱擁などが、たとえ言葉を伴わなくても、あいさつと考えられることからして、あいさつ行動とは、音声、手振り、身振り、表情、態度といった人間の全行動様式にかかわる極めて広汎な表れ方を持つ一種の表現活動として理解すべきものなのである。

中道・石田（1999）は、日本語教育の現場において「あいさつ」がどのように扱われているかに言及し、ほとんどすべての日本語教科書が学習項目として「あいさつ」を取り上げているが、実践報告等として耳にすることはほとんどなく、一般的な指導としては、コースの出だしで口慣らしとして利用したり、会話練習の中で付随的に扱うくらいであることが多いと指摘している。

日本語に限らず、多くの外国語の初級教科書において、きわめて早い段階で基本的なあいさつ表現が提示されており、語学教育において「あいさつ」が基本的かつ重要な項目として捉えられていることは明らかであるが、「あいさつ」に関して具体的かつ一歩踏み込んだ指導がほとんどなされていないのが現状である。

本稿では、鈴木（1981）にしたがい、感謝やその応答等、「あいさつ」に言及する時は、単に言葉を指すだけでなく、あいさつ行動全般を指すこととする。

1.2 感謝とその応答について

日本語の感謝表現としては、「（どうも）ありがとう（ございます）」や「どうも」、形式的には詫びの表現である「（どうも）すみません」等がある。西原（1994）は、日本語の感謝に対する応答表現として、「いえ、いえ」や「どういたしまして」、「こちらこそ」、「どうぞお手をお上げになってください」、「いいんだよ。気にしないで」等の表現を挙げている。また、森山（1999）は、お礼を、聞き手からの利益の提供に伴う利害関係上の心理的不均衡の修復（関係修復的言語行動）にとらえ、お礼に対する応答として、好意的で丁寧な「どういたしまして」のような否定的表現や、「こちらこそ」のような相互的表現、さらに、「いいですよ」や「大丈夫です」のような表現があるとしている。

中道・土田（1994）は、多くの日本語教材において、感謝表現として「（どうも）ありがとう（ございます／ございました）」や「（どうも）すみません／すいません」、「どうも」といった代表的な言語表現が扱われていること、その語義的意味が聞き手に対する感謝の表明であることが提示されていることを紹介したうえで、さらに日本語教材において扱うべき表現形式として、「本当にありがたくぞんじております」や「厚く御礼もうしあげます」、非言語行動等を挙げている。

感謝表現については多くの記述があるものの、それに対する応答表現についての記述は先行研究においてはきわめて少なく、感謝表現に関する記述に付随して簡潔に述べられるにとどま

る。しかも、応答表現として真っ先に挙げられるのは多くの場合、「どういたしまして」であり、次いで「いいえ」等の表現が続く。また、日本語教材の教師用指導書等には、応答表現についてどのように指導すべきか、という記述も管見の限りない。

そのなかで、國廣（1977）の指摘は示唆的である。國廣（1977）は日本とアメリカとの言語行動を比較し、日本語文化では、感謝表現に対して「いいえ」や「どういたしまして」等の打ち消しの応答がなされることもあるが、そのような発話がかえって他人行儀のひびきがすることがあり、代わりにこやかな表情と軽い会釈をすることが多いとし、そしてそれはわざわざ感謝されるほどのことをした訳ではないという含みを持ち得ることを指摘している。つまり、日本語においては、感謝に対する応答として非言語行動がより多く対応している、ということである。西（2006）では、國廣（1977）の裏づけを取るため、鹿児島市内において調査を行い、通行人に道を教えてもらったり写真を撮ってもらおう等してお礼の言葉を述べた後の相手の応答を言語行動、非言語行動別に記録した。言語行動では「無言」が284例中143例と全体の半数を占めており、また、言語行動と非言語行動とを組み合わせると、「無言＋笑顔（表情）」による応答が284例中49例、「無言＋笑顔（表情）＋会釈（態度）」による応答が284例中48例と、非言語行動のみで応答する割合が非常に高かった。さらに、先行研究や日本語教材で当然のように扱われている応答表現「どういたしまして」を使用した例は、本言語調査においては284例中わずかに2例であったことから、「どういたしまして」という言葉の使用頻度が現在、著しく低いことを指摘した。

「どういたしまして」という言葉の使用頻度が低いこと、「いいえ」や「どうも」等による応答もあるが、國廣（1977）や西（2006）の指摘するように、日本語においては、「ありがとう（ございます）」等の感謝表現に対する応答として非言語行動がより多く用いられている、という事実が日本語教材には反映されていない。それどころか、初級のごく早い時期に、「ありがとう（ございます）」の応答表現として「(いいえ,) どういたしまして」が提示されていることが多く、日本語学習者が不自然な応答の仕方を身に付けてしまう危険性が高いのではないかと考えられる。

2. 日本語教材及び教師用指導書における感謝とその応答の扱いについて

2.1 初級教材における扱い

近年の語学教育においては話し言葉が重視される傾向が強いが、日本語教育においても、初級では^{注2}、まず「聞く」、「話す」技能の指導に重点が置かれ、ある程度の定着が見られたところで、残る二技能「読む」、「書く」の指導にも力を入れる。

初級日本語教材4種についてみると、感謝表現及びそれに対する応答表現の提示状況は以下のようなものであった^{注3}。

注2 学習の開始から約200～300時間の授業時間をかけた段階で、基礎的文型、語彙約1500～2000語、漢字約500字の習得とこれらを使用した「聞く、話す、読む、書く」の四技能の定着を学習目標とする。

注3 ここで示した数値には、手紙やアナウンス等の独話で用いられたものは含まれていない。また、練習問題等に提示されている用例も除外してある。以下同様。

日本語教材（初級）	感謝表現			応答表現
	ありがとう ^{注4}	どうも	すみません ^{注5}	
ひろさんのたのしいにほんご1, 2 『ひろ』（年少者向け）	10	0	0	0
新日本語の基礎Ⅰ, Ⅱ 『新きそ』	14	3	0	3
みんなの日本語 初級Ⅰ, Ⅱ 『みんな』	21	5	5	4
新文化初級日本語Ⅰ, Ⅱ 『文化(初)』	34	1	3	7
小 計	79	9	8	14
合 計	96			

また、感謝表現の初出用例はそれぞれ以下のとおりである。

(2) 「ありがとう」^{注6}

『ひろ1』第4課

(3) (受付で)

ラオ：308 お願いします。

木村：はい、どうぞ。これはあなたの手紙ですか。

ラオ：はい、そうです。どうもありがとうございます。

木村：あ、ちょっと待ってください。このボールペンもあなたのですか。

ラオ：いいえ、違います。

『新きそⅠ』第2課

(4) Ⅲ. 毎日のあいさつと会話表現^{注7}

1. おはよう ございます。
2. こんにちは。
3. こんばんは。
4. お休みなさい。
5. さようなら。
6. ありがとうございます。
7. すみません。
8. お願いします。

『みんなⅠ』

(5) 1. あいさつ^{注8}

注4 「(どうも/本当に) ありがとう (ございます/ございました)」の形式で現れる。

注5 ここでは、感謝の意味で使用されるものを指す。

注6 女の子が人からプレゼントをもらう絵が描かれている。

注7 第1課に入る前の学習項目。

注8 第1課に入る前の学習項目。しょうゆを隣の人に渡している絵が描かれている。

①どうぞ。

②ありがとうございます。

③いいえ。

『文化(初)I』生活会話

初級の日本語教材において、感謝表現が96例使用されているのに対し、応答表現はわずかに14例である。例(5)を除く13例をここに挙げる。

(6) アリ：リーさん，誕生日 おめでとう ございます。

これは プレゼントです。どうぞ。

リー：わあ，何ですか。

アリ：インドネシアの シャツです。

リー：どうも ありがとう ございます。

アリ：どう いたしまして。

『新きそI』第7課

(7) ナロン：ちょっと すみません。スポーツセンターへ 行きたいんですが・・・

(中略)

女の人：そうです。5，6分で行けます。

ナロン：そうですか。どうも ありがとう ございました。

女の人：いいえ。

『新きそII』第27課

(8) ラオ：この 本， ありがとう ございました。

加藤：いいえ。役に 立ちましたか。

ラオ：ええ。知りたい ことが 詳しく 書いて あったので， とても 助かりました。

『新きそII』第46課

(9) サントス：すみません。甲子園まで いくらですか。

女の人：350円です。

サントス：350円ですね。ありがとう ございました。

女の人：どう いたしまして。

『みんなI』第5課

(10) ホセ・サントス：あ，もう 8時ですね。そろそろ 失礼します。

山田 一郎：そうですか。

マリア・サントス：きょうは どうも ありがとう ございました。

山田 友子：いいえ。また いらっしゃってください。

『みんなI』第8課

(11) ミラー：すみません。ユニューヤ・ストアは どこですか。

女の人：ユニューヤ・ストアですか。あそこに 白い ビルがありますね。

あの ビルの 中です。

ミラー：そうですか。どうも すみません。

女の人：いいえ。

『みんなI』第10課

(12) ミラー：あつ，小川さん。先日は 荷物を 預かって くださって， ありがとう ございました。

小川幸子：いいえ。

ミラー：ほんとうに助かりました。

『みんなⅡ』第41課

(13) 学生：すみません。

先生：はい。

学生：今日のテストは何時からですか。

先生：9時10分からです。

学生：何時までですか。

先生：10時までです。テストは9時10分から10時までです。

学生：どうもありがとうございます。

先生：いいえ、どういたしまして。

『文化(初)Ⅰ』第1課

(14) 佐藤：すみません。三越デパートはどこにありますか。

女の人：三越デパートは…ええと…ここです。

佐藤：ああ、東口ですね。どうもありがとうございます。

女の人：いいえ、どういたしまして。

『文化(初)Ⅰ』第5課

(15) ワン：すみません。新入生のワン・シューミンですが、部屋を教えてください。

遠藤：ええと、ワンさん、ワンさん、……ああ、香港のワンさんですね。

ワン：はい、そうです。

遠藤：ワンさんの部屋は3階です。3階の302号室です。

ワン：どうもありがとうございました。

遠藤：いいえ。あ、ワンさん、3時から学生会館の説明をしますから、ロビーへ来て
ください。

『文化(初)Ⅰ』第9課

(16) (コインランドリーの使い方を尋ねている)

ワン：すみません、どこに入れますか。

遠藤：ここです。

ワン：ああ、ここですね。これでいいですか。

遠藤：ええ。

ワン：どうもありがとうございました。

遠藤：いいえ、どういたしまして。

『文化(初)Ⅰ』第9課

(17) 佐々木：今日はアルンさんとお会いできて本当によかったです。

アルン：私もとても楽しかったです。

渡辺：アルンさん、今日は本当にどうもありがとう。

アルン：いいえ、こちらこそ。ごちそうさまでした。じゃ、私はここで失礼します。

佐々木：失礼します。

『文化(初)Ⅱ』第30課

(18) (旅行社で空港の説明を聞く)

斎藤：チェックインが済んだら、どうするんですか。

社員：危険物を持っていないかどうか簡単な検査をします。それから、出発待合室へ

行ってください。

斎藤：乗り遅れることはありませんか。

社員：だいじょうぶです。出発の時間が来たら係員が案内してくれますから。

斎藤：わかりました。どうもありがとうございました。

社員：いいえ。ではお気をつけて。

『文化(初)Ⅱ』第31課

初級における応答表現は、「いいえ」8例、「いいえ、どういたしまして」3例、「どういたしまして」2例、「いいえ、こちらこそ」1例であるが、『新きそ』及び『みんな』における初出の応答表現はいずれも「どういたしまして」であり、『文化(初)』においても、第1課で「いいえ、どういたしまして」が提示されている。

日本語の感謝表現には、「ありがとう」やあいまい表現「どうも」、「すみません」等のほか、「感謝します」等の遂行動詞、言いさして終わる「昨日は本当にお世話になりました……」等があるが、初級の段階では「ありがとう」系の表現を教えるのが一般的である。初級教材の教師用指導書において感謝表現について言及している箇所を見ると、感謝表現「どうもありがとうございます」は会話を行ううえで欠かせない表現であるという認識のもと、相応しい状況を提出して練習させるなどして、学習者に必ず言わせるようにする(『新きそⅠ(指導書)』第2課)、お世話になったお礼など重要な表現であるのでよく練習する(『新きそⅠ(指導書)』第25課)、といった記述が見られる。

「ありがとうございました」と「ありがとうございます」の違いについては、簡単に、完了したある(長い)期間全体でいろいろお世話になったことについてお礼を述べるもの(前者)と、その場のみのことについてのお礼(後者)という説明をするというものや(『新きそⅠ(指導書)』第19課)、どちらを使ってもよい場合が多いが、過去のことについてお礼を述べる場合やある物事が終結したような場合は、「ありがとうございました」を使うことが多い、と説明するもの(『文化(初)Ⅰ(指導書)』第7課)が見られた。

また、指導書ではなく本文に「訪問のマナー」が取り上げられ、以下のように提示している教科書もある。

(19) ①人を訪問する時

あらかじめ電話で日時を約束します。電話をしなくて訪問してはいけません。

約束した時間より早く行ってはいけません。約束の時間に行きます。

②玄関に入る時

ベルやチャイムを鳴らします。勝手にドアや戸を開けてはいけません。

玄関の戸を閉めないで上がってはいけません。

③うちに上がる時

靴を脱ぎます。

上がってから靴をそろえます。そろえないで部屋に入ってはいけません。

④手みやげを渡す時

手みやげは部屋に入ってから渡します。でも、花や生鮮食品は玄関で渡したほうが

いいです。

「どうぞお使いください。」とか、「お口に合わないかもしれませんが、召し上がってください。」などと言います。

⑤ごはんを食べる時

嫌いな物は無理に食べなくてもいいです。

⑥帰るとき

「今日は本当にありがとうございました。」とお礼を言います。お礼を言わないで帰ってははいけません。

⑦次に会った時

必ず「先日はどうもありがとうございました。」とお礼を言います。^{注9}

『文化(初)Ⅱ』第21課

応答表現「どういたしまして」については、発音指導における注意事項として、「どういたしまして」などとなりがちなので、「いたしまして」だけをゆっくり丁寧に練習し、そのあと全体を言わせる（『新きそⅠ(指導書)』第7課）、といった記述、同じく応答表現である「いいえ」については、「どうもありがとうございます」の感謝の言葉に対する簡単な返しことばである（『新きそⅡ(指導書)』第27課）、という説明、「こちらこそ」は、お礼を言われた場合に自分からも感謝の意を表したい時に使う表現である（『文化(初)Ⅱ(指導書)』第7課）、といった説明が見られる。しかし、どのような場面でどのような表現が使用されうるか、どのような人物に対して、どう述べどう返答すべきか、という指導は、ほとんどなされていないと言ってよい。特に、感謝に対する応答表現として、「いいえ」に次いで「どういたしまして」が初級でも多く提示されているが、日本語教育の現場からは、「どういたしまして」が載せられている初級教科書を使用すると、母語文化の影響を受けて「どういたしまして」を多用する学習者が出てきて会話が不自然になることもあるため使いづらいという声も聞かれる。「どういたしまして」は西（2006）で述べたように、使用頻度も低く、使用される場面や対象者も限定されるからである。一度も「どういたしまして」という表現を用いたことのない日本人も多くいる中、外国人に重要学習項目として教えることには問題があろう。日本語の一般的な会話における応答表現としては、相手との関係（親疎や上下など）やお礼の内容により、「いいえ」や「いえいえ」、「うん」、「いいよ」、「はい」、「うん」、「どうも」等のヴァリエーションがあるが、実際の談話においては、「いいえ」や「いえいえ」等、否定型の表現が比較的多く見られ、それにもまして、笑顔や会釈などの非言語行動による応答が多用される。日本語文化の習慣として、できれば初級の段階でもこのような日本語の特徴は学習者に提示されることが望ましい。

注9 以前のことに付いて、「先日は…」とお礼を言う言語文化はそう多くないため、日本語教育におけるこの指導は重要である。

2.2 中級教材における扱い

中級では^{注10}、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の四技能をすべて満遍なく指導し、初級で学んだことをもとに、新しい言葉の習得と運用を目指す。

中級日本語教材3種についてみると、感謝表現及びそれに対する応答表現の提示状況は以下のとおりである。

日本語教材（中級）	感謝表現				応答表現
	ありがとう	どうも	すみません	言いさし	
新日本語の中級 『新(中)』	15	3	1	0	1
文化中級日本語 I, II 『文化(中)』	7	0	0	0	2
日本語教育映像教材中級編 関連教材 伝えあうことば 『ことば(中)』	27	17	1	2	5
小 計	49	20	2	2	8
合 計	73				

中級の日本語教材においては、感謝表現が73例使用されているのに対し、それに対する応答表現が提示されているものは8例にとどまった。以下に、感謝表現と応答表現がセットで現れる例を挙げる。

(20) 李 : 初めまして。中国の李と申します。会社ではいつも伊藤さんにお世話になっております。

伊藤夕子：初めまして。お名前はよく伺っております。

李 : 今日はお招きいただきまして、**どうもありがとうございます。**

伊藤夕子：いいえ、私達も李さんがいらっしゃるのを楽しみにしていたんですよ。

『新(中)』第6課

(21) キム：今日はお忙しいところ、**本当にありがとうございました。**

佐藤：いいえ。何かわからないことがあったら、いつでも聞いてください。

キム：**どうもありがとうございます。**また、何かあったら、お願いいたします。

『文化(中)I』第2課

(22) 敏子：叔父さん、ごぶさたしていてすみません。

叔父：本当に久しぶりだね。

注10 語彙約5000～7000語、漢字約1000～1500字程度を習得。種々の言い回しや慣用句、成句を理解し短文が作成できることを学習目標とする。また、辞書等を利用して学習者自身で自習できることを目安とする。

敏子：保証人になっていただいた時はお世話になりました、本当にありがとうございました。

叔父：いやいや。仕事にはもう慣れた？ 『文化(中)I』第4課

(23) (訪問先の応接室で)

中村：先日は、どうもありがとうございました。

田中：いやいや、こちらこそ。 『ことば(中)』seg.02①

(24) (警官に道を教えてもらう)

警官：江戸橋を降りると、この地図のとおり。駅は地下道でつながっているけれども、両方の駅にAの1からAの4までの出口があるから。

鈴木：あっ、そうですか。どうもありがとうございました。

警官：いえ。 『ことば(中)』seg.05③

(25) (デパートで買い物をし、精算する)

店員：たいへんお待たせいたしました。カードをお返しいたします。こちらはお控えでございます。どうも、ありがとうございました。

泰子：どうも。 『ことば(中)』seg.08②

(26) (断りの電話を入れる)

母：あのう、せっかくお骨折りいただいて、こんなこと、あの、ほんとにあれなんでございますが、あのう……。

おじ：ああ、そうですか。わたしもすっかり緊張しちゃったからなあ。

母：あ、いえいえ、沢木さんにはほんとにお世話になりました。

おじ：いやいや、とんでもない。 『ことば(中)』seg.14④

(27) (バザー会場で知り合いの客Aを見つけて)

篠塚：まあ、今日は、わざわざどうもお運びいただきまして。

客A：いいえ、ご案内ありがとうございました。まあ盛況でよろしゅうございましたねえ。

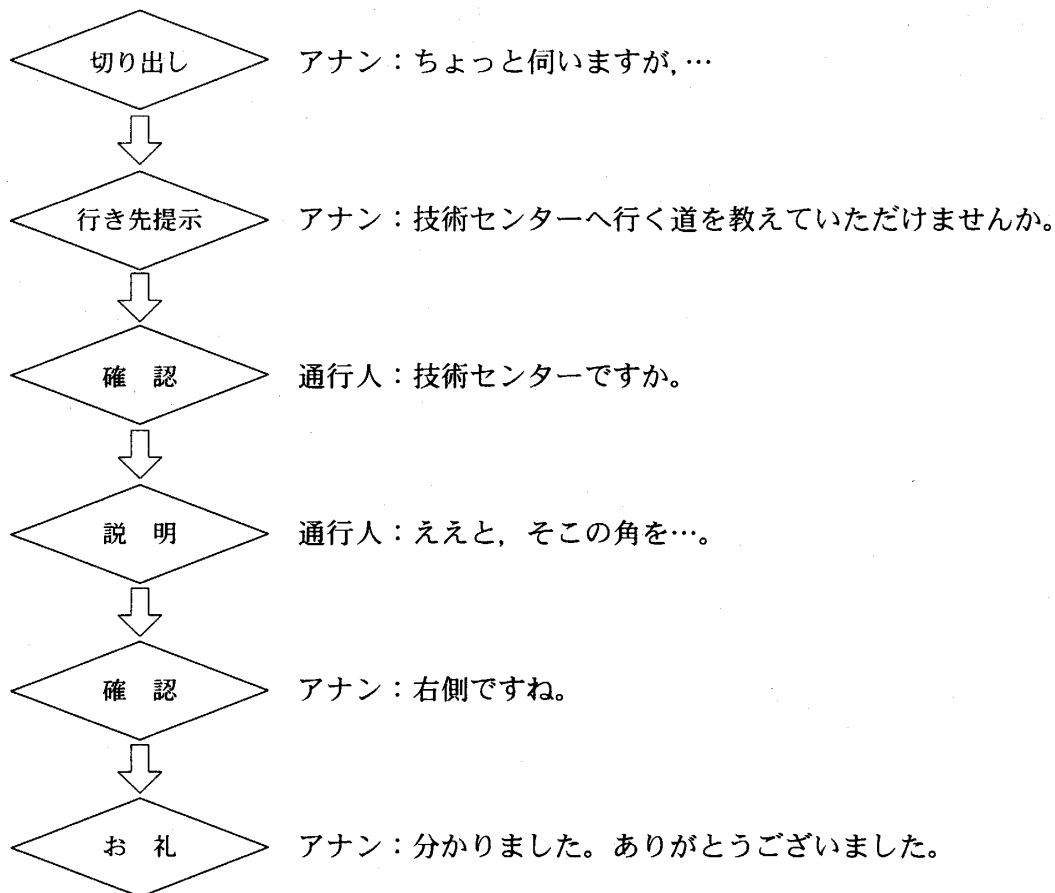
篠塚：いいえ、なんですか、こんなことも初めてでございますよ。至りませんことばかりで。 『ことば(中)』seg.24①

中級教材においては、上記のごとく、「いいえ/いえ」が4例、「いやいや」、「いやいや、こちらこそ」、「いやいや、とんでもない」、「どうも」^{注11}が各1例と、初級教材に比べ、より多様な表現が提示されている。また、初級教材には比較的多く見られた「どういたしまして」が、今回調査した中級教材では1例も見られなかったことは興味深い。感謝表現も中級では多様になり、日本語の自然な会話において見られる言いさしの形式が見られるようになる。中級教材の教師用指導書において感謝表現について言及している箇所をみると、『新(中)(指導書)』では、

注11 互いが感謝の表現を使用するのは、店員と客の間で多く見られる。藏坪他(2006)参照。ただし、これらは厳密には感謝に対する応答として感謝表現を用いているのではなく、それぞれが「(品物を購入して下さって)ありがとうございます」、「(品物を売って下さって)ありがとうございます」と感謝の言葉を述べているものと考えられる。

「折り入って頼み事をする」、「様々な待遇レベルで許可を求める」、「外で道を聞く」、「おごる・おごられる」といった談話の指導として、談話の流れ（型）を以下のように示しており、この中ではお礼は談話を終了させる（切り上げる）機能を果たすもののように提示される。

(28) [談話の流れ]



このように中級教材の指導書においても、感謝表現の談話の中で果たす機能については触れられているが、どのような感謝に対してどのように応答するかについて詳しく述べられたものは管見の限りない。

また、感謝表現といっても、返答する必要のない類のものもある。店での買い物で、店員に「ありがとうございました」と言われた場合や、「おめでとうございます」という祝福の言葉を述べて「ありがとうございます」と言われた場合には、「いいえ、（どういたしまして）」と返すのは不自然である^{注12}。さらに、感謝表現そのものが応答表現として用いられることもあるため、談話レベルで見れば、一口に感謝表現と言っても様々な機能を持つ。中級では、感謝表現の本来的な用法、やりとりをしっかりとおさえた上で、談話レベルでの感謝の機能について指導を行う必要があるだろう。

注12 森山（1999）は、これらのお礼は一種の謙讓的用法としてのお礼であり、本来の感謝やお詫びのような利害の不均衡とは言いにくいことを指摘している。

2. 3 定住者向け教材における扱い

『中国からの帰国者のための生活日本語Ⅰ・Ⅱ』は、日本に永住（定住）することが前提とされるいわゆる中国残留孤児等とその家族が、より早くかつ円滑に日本の社会に適応できるように編まれた日本語教材であり、日常生活における自然な日本語のやりとりが会話文として提示されている。また、各課には中国語の訳文及び解説文も付されているため、自習用にも使用できる教材である。本教材における感謝表現とそれに対する応答表現の提示状況は以下のようであった。

定住者向け日本語教材	感謝表現				応答表現
	ありがとう	どうも	すみません	言いさし	
中国からの帰国者のための生活日本語Ⅰ、Ⅱ 『生活』	36	10	6	0	8
計	52				8

以下に応答表現の示された会話文を挙げる。

- (29) (林さんが山本さんを訪ねて教を請い、お礼を言って辞去する)

林：どうもありがとうございました。

山本：いいえ。

『生活Ⅰ』第1課

- (30) (通行人に代わりに電話をかけてもらい、礼を述べる)

林：ありがとうございました。

通行人：いいえ、どういたしまして。

林：ほんとうに、ありがとうございました。

『生活Ⅰ』第3課

- (31) 林：ちょっとすみません。

通行人：はい。

林：北京菜館へ行きたいんですが。

通行人：北京菜館ですか。ええと……。

林：あ、この地図を見てください。東友ストアの裏です。

通行人：ああ、東友ストアなら、あの信号を右に曲がったところですよ。

林：はい、分かりました。どうもありがとうございました。

通行人：いいえ。

『生活Ⅰ』第8課

- (32) (自転車の修理代を支払う)

林：ええと、800円ですね。

店員：はい、そうです。

林：どうもありがとうございました。

店員：ありがとうございました。

『生活Ⅰ』第10課

(33) 林夫人 : あのう、断水っていうのは どういう意味ですか。使っては いけないって
いうことですか。

山本夫人 : あ、いえ、水が出ないっていうことです。水が使えないんですよ。

林夫人 : 火曜日の夜10時から 水曜日の朝6時までですね。

山本夫人 : そうですね。

林夫人 : どうもありがとうございました。

山本夫人 : いいえ。

『生活 I』第17課

(34) (銀行で送金用紙の記入の仕方を案内人に尋ねている)

林 : じゃ、これで いいでしょうか。

案内人 : はい、では それを 3番窓口へ お出してください。

林 : どうもありがとうございました。助かりました。

案内人 : いいえ。

『生活 I』第20課

(35) (家庭訪問について尋ねる)

林夫人 : で、どんな話を すればいいんでしょうか。

山本夫人 : そうね……。友達が いるかどうかとか、日本語は だいじょうぶかとか、
そんな話を すればいいんじゃないかしら。

林夫人 : そうですか。分かりました。どうもありがとうございました。

山本夫人 : いいえ。

『生活 I』第21課

(36) (病院で診察を受けている)

林 : あのう、もう来なくてもいいんでしょうか。

医者 : ええ、もういいですよ。

林 : どうもありがとうございました。

医者 : はい。

『生活 II』第9課

本教材では、応答表現として「いいえ」が5例あったほか、「いいえ、どういたしまして」、
「はい」、「ありがとうございました」がそれぞれ1例ずつ見られた。また、「いいえ、どういた
しまして」および「どうも」には以下のような解説が付されていた^{注13}。

(37) [いいえ、どういたしまして]

「いいえ」は「不」に同じ。「どういたしまして」は「ありがとうございました」に対
する返事で、「不谢」「不客气」に相当する。

『生活 I』第3課

(38) [どうも]

「どうもありがとうございました」、又は「どうもすみません」を省略した言い方。「あ
りがとうございました」又は「すみません」と同じ意味であり、それらの代わりに用
いる。)

『生活 I』第4課

他の教材と異なり、日本語学習者が実際の生活の中で遭遇する可能性の高い会話文が集めら

注13 中国語による解説文の日本語訳。

れていること、日本語学習者の母語（中国語）による訳文、解説文が付いていることから、学習者にとってはより深く言葉や文の意味を理解しやすい構成になっている。そのためか、感謝表現やそれに対する応答表現にも、様々な状況、人間関係に応じた様々な言い回しが見られる。

3. 感謝に対する応答の指導

中道・土井（1994）が指摘するように、代表的な感謝の言語表現は、多くの教材で扱われており、その語義的意味が聞き手に対する感謝の表明であることは提示されている。しかし、どのような場面で、どのような相手に対して、どのように言うか、また、それらの感謝表現に対して、言語行動、非言語行動を含め何と応答すべきかが提示されている教材は、今回調査した中ではなかった。前述のとおり、日本語文化においては、誰かから感謝された場合、特に感謝される内容がごく軽い場合には、笑顔や会釈など、表情や態度で応答する割合が高い。何らかの言葉を発したとしても、会釈とともに聞き取れないほどの声の大きさを「あっ」と軽く付け足すくらいである。親しい友人や家族とのやりとりにおいては、「ん」、「うん」、「あー」、「うん」と文字化しにくいような音声で応答していたり、全く反応を示さないことさえある。ただし、日本語文化は非言語行動を用いて応答する傾向がいかに強いと言っても、電話による会話等、相手に表情や態度が伝えられない場合にはやはり音声化（言語化）する必要がある。また、感謝される内容が比較的大きなもので、それに伴って感謝表現が、「先日は本当にお世話になりました、何とお礼を申し上げたらよいやら……、本当にありがとうございました」のように極めて丁寧なものであったら、応答する側がたとえ相手よりも上の立場にあったとしても、やはり、「いいえ、とんでもございません」等のように否定型の丁寧な表現を用いる必要も出てくる。

では、どの段階でどのような応答を学習者に提示するのが望ましいのであろうか。以下に試案を提示する。

初級の段階では、まず「です・ます体」から学習することを考えても、より汎用性の高い丁寧な応答表現が提示される必要がある。一般に、日本語文化において、親しい関係、目下または同等の関係にある人に対しては、「うん」や「はい」等の肯定型の応答を選択する傾向が強く、さほど親しくない人、目上の人に対しては、「いえいえ」や「いいえ」等、否定型の応答をする傾向が強い。このことから、まず、「いいえ」を一般的な感謝に対する応答表現として導入することが妥当と考えられる。初級の後半で、「いえいえ」や「いいえ、こちらこそ」等、否定型の表現を軽い会釈等の非言語行動とともに提示し、状況や相手に応じて多少の使い分けができるようにしておくことが望ましい。また、年少者向けの教材であれば、先生に対しては「いいえ」、クラスメートに対しては「うん」、といったように、相手によって表現を使い分けることを指導してもよい。

中級の段階では、笑顔（ほほえみ）や会釈、お辞儀等、日本語文化に広く見られる非言語行動による応答について必ず指導する必要がある。このほか、「(いいえ、) とんでもないです／ございません」等の否定型の応答があること、家族や親しい友人など、相手や状況によって

は「はい」や「うん」などの肯定型の表現を用いて応答することができること、感謝表現と同じく、応答表現にも「どうも」というあいまい表現が用いられることもあることなどを指導することが望ましい。中級の後半では言いさし表現も提示しておくこと、学習者がそのような場面に出合ったときに混乱しなくてすむ。

また、「(いいえ), どういたしまして」は、その使用頻度から言っても、提示するのであれば初級ではなく中級の段階が望ましい。本来、「どういたしまして」は相手の言葉を打ち消す語であるが、特に若い世代においては、「どういたしまして」が否定表現であるという認識さえ薄れている。また、否定型の表現であるとはいえ、この表現を用いることで尊大な態度のようにとられることもあるので注意を要する^{注14}。

感謝に対して必ず言葉による応答を行うという言語は少なくない。感謝という行為は日常的に行われるものであり、初級の段階で、使用に多くの条件や制限がある「どういたしまして」をそれに対する応答表現として提示することは、日本語学習者に「どういたしまして」を濫用させ、その結果、不自然なやりとりが身につけてしまうという危険性がある。いずれにしても、日本語の表現の特徴をおさえた上で、それぞれの談話にあった応答表現が選択できるように指導する工夫が必要である。

4. おわりに

以上、日本語学習教材において、感謝表現に対してどのような応答が提示されているかを調査し、応答表現をどのように導入しどのように学習者に指導すべきかの試案を提示した。感謝にしてもそれに対する応答にしても、あいまい表現や言いさし表現、非言語行動（表情、態度等）等、その是非はさておき、きわめて日本語的と言わざるを得ない表現が多く見られる。実際のコミュニケーションの中で学習者は必ずしもこれらの表現を用いる必要はないが、知識として持っておくだけでコミュニケーション能力が格段に向上することは間違いない。日本語教材においては、まずはいわゆる規範的な日本語を提示することが当然必要であるが、学習者のコミュニケーション能力の向上をより重視し、談話がより円滑に行われるための工夫も重要だと考える。

参考文献

石井米雄・千野栄一 (2004)『世界のことば・出会いの表現辞典』三省堂

國廣哲彌 (1977)「日本人の言語行動と非言語行動」『岩波講座日本語2 言語生活』岩波書店、pp.1-32.

藏坪真梨子・坂上佳奈美・塩入舞子・大徳綾美・徳森麻美・濱園麻依子・福元香奈恵 (2006)「『ありがとう』に対する言葉と態度」鹿児島県立短期大学提出卒業論文（文学科日本語日

注14 西 (2006) 参照。

本文学専攻), pp.1-105.

森山卓郎 (1999) 「お礼とお詫び——関係修復のシステムとして」『國文學 解釈と教材の研究』5月号, 第44巻6号, pp.78-82.

中道真木男・石田恵里子 (1999) 「日本語学習者と『あいさつ』—日本語教育の場で」『國文學 解釈と教材の研究』5月号, 第44巻6号, pp.118-125.

中道真木男・土井真美 (1994) 「日本語教育における感謝の扱い」『日本語学』13, No.8, pp.47-54.

西原鈴子(1994)「感謝に関する一考察」『日本語学』Vol.13, No.8, pp4-9.

西香織 (2006) 「ありがとうと言われたら—鹿児島市における意識調査及び街頭調査を通して—」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』第37号, pp.1-15.

佐藤喜代治 (1977) 『国語学研究事典』明治書院

鈴木孝夫 (1981) 『『あいさつ』とは何か』『「ことば」シリーズ14 あいさつと言葉』文化庁編, 大蔵省印刷局, pp.34-46.

日本語教材・教師用指導書

『ひろこさんのたのしいにほんご1』(1999) 根本牧・尾代瑛子, 凡人社

『ひろこさんのたのしいにほんご2』(2001) 根本牧・尾代瑛子・永田行子, 凡人社

『新日本語の基礎Ⅰ 本冊 漢字かなまじり版』(1990) 海外技術者研修協会, スリーエーネットワーク

『新日本語の基礎Ⅰ 教師用指導書』(1992) 海外技術者研修協会, スリーエーネットワーク

『新日本語の基礎Ⅱ 本冊 漢字かなまじり版』(1993) 海外技術者研修協会, スリーエーネットワーク

『新日本語の基礎Ⅱ 教師用指導書』(1994) 海外技術者研修協会, スリーエーネットワーク

『新日本語の中級 本冊』(2000) 海外技術者研修協会, スリーエーネットワーク

『新日本語の中級 教師用指導書』(2002) 海外技術者研修協会, スリーエーネットワーク

『みんなの日本語 初級Ⅰ 本冊』(1998) スリーエーネットワーク, スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級Ⅰ 教え方の手引き』(2000) スリーエーネットワーク, スリーエーネットワーク

『みんなの日本語 初級Ⅱ 本冊』(1998) スリーエーネットワーク, スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級Ⅱ 教え方の手引き』(2001) スリーエーネットワーク, スリーエーネットワーク

『新文化初級日本語Ⅰ』(2000) 文化外国語専門学校, 凡人社

『新文化初級日本語Ⅰ 教師用指導手引書』(2000) 文化外国語専門学校, 凡人社

『新文化初級日本語Ⅱ』(2000) 文化外国語専門学校, 凡人社

『新文化初級日本語Ⅱ 教師用指導手引書』(2000) 文化外国語専門学校, 凡人社

『文化中級日本語Ⅰ』(2004) 文化外国語専門学校, 凡人社

- 『文化中級日本語Ⅱ』(1997) 文化外国語専門学校, 凡人社
- 『中国からの帰国者のための生活日本語Ⅰ』(1983) 文化庁, 凡人社
- 『中国からの帰国者のための生活日本語Ⅱ』(1985) 文化庁, 凡人社
- 『日本語教育映像教材 中級編 関連教材 伝えあうことば 1 シナリオ編』(1991) 国立
国語研究所, 大蔵省印刷局
- 『日本語教育映像教材 中級編 関連教材 伝えあうことば 2 語彙表』(1991) 国立国語
研究所, 大蔵省印刷局
- 『日本語教育映像教材 中級編 関連教材 伝えあうことば 3 映像解説書』(1993) 国立
国語研究所, 大蔵省印刷局
- 『日本語教育映像教材 中級編 関連教材 伝えあうことば 4 機能一覧表』(1994) 国立
国語研究所, 大蔵省印刷局

(平成18年5月10日受理)